

# 英語ライティングの指導法

加藤典子\*

## How to teach English Writing

Noriko Kato

The purpose of this paper is to introduce a new teaching method of English writing, "rule-based teaching method." This method makes it possible that students learn writing rules of an English letter, narrative, paper and so on, and grammatical rules of how to make proper use of English articles, tense, and aspect. That is to say, teachers have to abandon the conventional method by which they teach their students Japanese-English translation, and have to teach writing and grammatical rules particular to English.

### 1. Introduction

#### 1.1. 目的

本稿における目的は、“英語教師にとっても生徒にとっても非常に苦手とされる英語ライティング”というイメージを払拭し、教える側も効率よく教えることが出来、また、教わる側も楽しく取り組み、実力も自然に無理なくついていくような新しい英語ライティング指導法を提案することである。

新しい指導法を詳しく導入・説明する前に、英語ライティングを担当したことのある教師であれば誰もが経験しているであろう状況を紹介しておくことにする。教師が生徒に英語を教えるにあたって、様々な科目・教え方が存在するが、特に英語ライティング、あるいは、英作文を生徒に教えなければならない時、たとえどんなに御自身の英語力に自信を持っていらっしゃる先生方でも辛い思いを経験したことがあるのではないかと推察する。何故なら、英語の苦手な学生達に向かって、いきなり長いパラグラフ単位の英作文を書けといってもそれは無理であるから、結局最初は、センテンス単位の和文英訳を教えることになる、生徒は生徒でなかなか自分の考えを一文すら正確な英文に訳すことが出来ないもどかしさを感じ、ますます英語ライティングに苦手意識を感じるようになり、教師は教師で生徒が提出した用紙が真っ赤になる程、文法から構成から様々なことを細かく添削する羽目になり莫大な

時間もかかってしまい、教師の側もうんざりしてしまう。そのうんざり具合を明らかにわかりやすい大袈裟な例で示せば、以下のようになる：英語で手紙を書いてみようという設定で、教師が「拝啓 残暑の厳しい毎日ですが、〇〇様にはますますご清祥のこととお慶び申し上げます」を英訳しなさいと命令したとする。生徒は仕方なく必死になって "I respect you. The heat of late summer is still severe, but I'm very glad when I guess that 〇〇 lives in happiness...?????" という訳のわからない直訳を始めることになり、採点する側の先生も窮地に陥ってしまう（勿論、このような教え方をする教師は決して実在しないはずであるが）。

このような教え方には大きく2つの問題があると言える。1つ目の問題点は例からも明白であるように、日本語にとって典型的な手紙文の書き方をそのまま英語に直訳さえすれば、英語の手紙文になるというものではないということである。日本語には日本語に独特の手紙の書き方が存在するように、英語には英語独特の手紙文の書き方が存在するのであるから、まずは英語特有の手紙文の書き方・形式・ルールを教える必要があるということである。つまり、日本語らしい日本語で書かれたものを英訳させるという、題材選びそのものが間違っていることが従来の指導法の大きな問題点なのである。第2の問題は、もっと細かいテクニックに関することで、

\* 東京工芸大学工学部基礎教育研究センター非常勤講師  
2001年9月10日 受理

もし上記の日本語を無理やり英語に訳したものが "I respect you. The heat of late summer is still severe. but I'm very glad when I guess that ○○ lives in happiness." であっているとするのならば、何故 "Heat" ではなく "The heat" なのか、そして何故 "in the happiness" ではなくて "in happiness" なのかという細かい文法レベルの問題をどのように生徒達にわかりやすく教え込むことが出来るかということである。多分、従来の指導では、生徒がもし "in the happiness" と書いてしまったのなら、その部分を赤ボールペンで直し、"the" の上に×印をつけ、傍に "in happiness" と書いて訂正するだけだったはずである。これではその場凌ぎの直しにしかならないのであって、冠詞の使い分けのルールが生徒には最後までわからず、いつまでたっても同じ間違いを生徒は繰り返すだけで、間違えたらまた訂正し、間違えたらまた訂正し…の繰り返しである。

以上の2つの問題を解決する新しい英語ライティングを発案する為には、言語学のある2つの分野の助けを必要とする。1つ目の問題を解決するには、選択体系機能言語学という分野が必要になり、2つ目の問題を解決するには、認知言語学という分野を基にして英語教育を考える事が必要になる(これらの言語学の専門分野については3章・4章にて詳しく説明する)。次章以降で、従来の英語ライティング指導法の問題点を指摘してから、上記の言語学の分野を基にしていかに新しい英語ライティング指導法を導くのかを紹介していくことにする。

## 1.2. 構成

本稿の構成は以下のようなものである。2章で、従来の英語ライティング指導法の問題点2つを指摘する。1つ目の問題である「間違った題材選び」を2.1.で取り上げ、2.2.では、2つ目の問題点である「無言の消極的な文法指導」を扱う。3章では2.1.で挙げられた問題を解決する新しい英語ライティング指導法を導入する。3.1.では、1つ目の問題を解決する手段として、選択体系機能言語学という分野を紹介し、3.2.で選択体系機能言語学を基にした「パターン・ルールを基調とした教え方」を具体的に展開する。4章の4.1.では、2.2.で取り上げられた2つ目の問題点を克服する為、認知言語学という分野紹介をし、4.2.ではそれを基に、日本語と英語の表現の相違をわからせる

為に、英語ではどのようにして名詞や動詞を認知しているのかを明示し、4.3.では、英語の認知ルールを基にして体系的に英語の名詞や動詞(時制など)を教えるという新しい文法指導法を導入する。5章では、3章と4章で提案された2つの新しい指導法をまとめて、わかりやすく新しい指導法「Rule-basedな英語ライティング指導法」についてを説明し、6章に結論を導く。

## 2. 従来の指導法の問題点

### 2.1. 間違った題材選び

従来の英語ライティング指導法の1つ目の問題点は、1章の前半で挙げた「拝啓…」の例のように、取り上げる題材そのものが間違っていることである。「拝啓 ○○様にはますますご清祥のこととお慶び申し上げます」を英訳しなさいという例は大変大袈裟なものであったが、しかしながら、現実にはその例に近いような和文英訳をひたすら英作文の授業中に教え込むやり方はなかなか消えていないようである。大半の英語ライティングの教科書を見てみても、日本語らしい日本語で書かれた文章を英訳させていく問題形式になっているものが多い。このような教え方も、英語を書く際の正しい文法や、よく使われる便利な表現・言い回し等を1つずつ教え込み、それらを生徒の頭の辞書の中に詰め込ませ、いざという時にそれらの便利な表現を頭の引き出しから取り出して使って下さい、という点では意義があるのかもしれない。

ただ、そこで問題になるのは、日本語にとってのみ特有で有効な書き方が成されている題材(例えば、手紙・論文など)を選んでそのまま英訳させてしまっているという点である。つまり、日本語特有の書き方・ルールで書かれた手紙をいくら一生懸命英訳させて、正しい英文法、正しい英語表現で書けるように指導しても、英語話者から見ればその英語の手紙はほとんど意味を成さない不思議な手紙としかなり得ない。"I respect you. The heat of late summer is still severe. but I'm very glad when I guess that ○○ lives in happiness...?????" という英文で始まっている手紙を英語話者が受け取っても、一体どこが大事な用件なのか、何を手紙で伝えたいと思っているのかわからず、混乱を招くだけである。

それは、英語には英語に特有の手紙の書き方・ルールが存在するにも関わらず、その英語のルールを無視して日本語のルールに則って英文で手紙を書いてしまったからである。これではいくら一生懸命時間をかけて指導しても、残念ながら、英語の手紙が書けるようになりましては言えない。いくら、細かい目で見れば正しい英語表現や英文法を教えているとしても、上述のように、使う題材（日本語特有の手紙など）そのものを取り違えてしまっている間違っただけの和文英訳を教え続けていたのでは、いつまでたっても、英語の書き方・英語のルールに則った、英語話者に通じる英作文は書けないはずである。この問題点に対する解決策は、3章で論じることにする。

## 2.2. 無言の消極的な文法指導

従来の指導法の2つ目の問題点は、1章の例 ("I respect you. The heat of late summer is still severe, but I'm very glad when I guess that ○○ lives in happiness...????") でも軽く触れたように、名詞の前に冠詞の"a"や"the"をつけるべきなのかつかないべきなのかという、非常に複雑で微妙な英語表現の教え方が未だに不明確で徹底していない為、仮に、生徒が"in the happiness"と書いてしまった時は、"the"の部分の赤ボールペンで消して訂正することしかしないという点である。訂正するのは良いが、何故、この表現に冠詞は必要なのかという理由をきちんと説明してあげない限り、生徒達はいつまでたっても、冠詞の使い分けの習得ができないまま終わってしまう。難しいのは、このような冠詞の使い分けだけに限らず、以下に示すような、動詞の時制・アスペクト<sup>1</sup> (完了相や進行相等の「相」のこと)の使い分けも、日本人英語学習者にとっては、いつまでたってもよくわからない難関なので、多くの生徒達が間違え易い箇所と思われる。以下の(1)では冠詞の使い分けについて、(2)では動詞のアスペクトの使い分けについて、(3)では動詞の時制の使い分けについて、それぞれ陥り易い間違いを例示する：

- (1)<sup>2</sup> a. Men speak language but animals don't.  
 b. Men speak languages.  
 c. He doesn't understand the language.

d. If you want to learn a language you should go to the country where it is spoken.

- (2)<sup>3</sup> a. \*I'm very busy because I am belonging to a club. (→belong to)  
 b. \*She is resembling her mother. (→resembles)
- (3) a. \*I got hungry. (→am)  
 b. \*She said she has a headache. (→had)

(1)の4つの例文の下線部分は全て正しい冠詞の使い分けがされているものである。しかし、生徒達がこのように正確に、aからdの状況に応じて、正しく"language"という単語と冠詞を組み合わせることが出来るであろうか。どのようなルールに沿って冠詞の使い分けが成されているのかは、日本人にとって大変わかりにくい。また、(2)は、英語の動詞のアスペクトがわかっていない為に、日本語でいう「属している」や「似ている」の「～ている」を英語で無理やり表そうとした結果、間違っただけの動詞を進行形にしてしまっている例文であり、(3a)では、日本語で言う「お腹がすいた」をそのまま直訳した結果"I got hungry"としているが、英語では決してこのような表現は使われず、また、(3b)は、日本語では『彼女は「頭が痛い」と言っていた』と言えるからといってそれをそのまま英語にした為、英語の主文と複文の動詞の時制の一致を忘れたが故に非文法的であるという事を示す例文である。

以上の日本人がよく間違えやすい2つの文法事項：冠詞の使い分け・動詞の時制とアスペクトは、英語ライティングの時間に生徒達も必ず間違えてくる表現でありうるのだが、従来のやり方のように、これらのような間違いをただ、1つ1つしらみつぶしに、赤ボールペンで訂正するだけという無言の消極的な指導では、単なるその場凌ぎにしかならず、いつまでたっても、生徒達は冠詞や動詞の時制の使い分けの奥に潜むルールを教えてもらえずに同じ間違いを繰り返すだけである。そこで、これらの間違いを二度と繰り返させないためにも、日本人は何故このような2つの文法事項を中心に英語表現を間

違えてしまうのか、そして、英語の冠詞や動詞の時制やアスペクトの使い分けの根底にはどのようなルールが潜んでいるのかを体系的に教える必要があるのである。これら文法指導に関する解決策は、4章で提案される。

### 3. 英語特有の書式ルールの教授

この章では、2.1.で取りあげた第1の問題点(間違った題材選び)を解決する為に、選択体系機能言語学という分野に基いた英語教育から導き出された英語ライティング指導法について説明する。その新しい英語ライティング指導法とは「パターン・ルールに基いたライティングの教え方」というものであるが、その土台となる選択体系機能言語学についてを、3.1.で紹介しておく。

#### 3.1 選択体系機能言語学について

Halliday (1978) に代表される選択体系機能言語学<sup>4</sup>は、大雑把に言えば、我々の日常的に使っている言語が我々の生活している社会や実際の場面においてどのように働き、機能していて、いかにして意味を伝えているのかを研究する分野である。つまり、もう少し具体的に言うと、日常生活の中で様々な目的や用途に応じて我々が言語表現を選択し使い分けしているという現実から、いかにして我々は、ふさわしい言語表現で誰にどこで何を伝えるのかをいつの間にかコントロールしているのかを追究していく分野なのである。我々が様々な場面においてふさわしい言語表現・言葉遣いを選択しなければならないのは、ある特定の場面において特定の目的を果たす為の会話には、必ず一定の始まり方・進み方・終わり方というパターンが存在しているからである。

その具体的なパターンというのは、例えば、レストランのウェイトレスとお客さんの会話、友人とのゴシップ、目上の先生との会話等のように色々考えられる。レストランにおける会話であれば、ウェイトレスはお客様に失礼のないように丁寧に注文を伺い、料理をお客様に運び、快適にお食事を楽しんで頂くという大事な目的を持ってお客に話し掛ける。最初に「いらっしゃいませ」と言い、メニューを配りながら「ご注文がお決まりになりましたらお

呼び下さい」と話し掛けると、お客は注文をし、次に料理が出来たら「お待たせしました」と言いながらお客のテーブルに料理を置くと、丁寧なお客は「すみません」とお礼をウェイトレスに言い、お客がレストランを出ていく際にウェイトレスは「有難うございました」と言う。以上5つの発話を書いたが、必ずこのステップ・順番、このパターンを踏まない限り会話は成り立たないし、お客を迎え入れて、気持ちよく食事をしてもらい、終わったら帰って頂くという目的を達成出来ないのである。しかし、いくら、レストランはサービス業だからとはいえ、お客の気分をよくさせようとするあまり「いらっしゃいませ。まあ、今日のお客様のお洋服、それにアクセサリも大変素敵ですねえ。あら、ヘアースタイルもとてもお似合いで…」と、延々とお客を褒め続けてばかりいては、食事をしに来たお客にとってはいつまでたっても注文出来ず、食事にもありつけず、これではレストランにおける会話としてはスムーズに成り立たない。このようにお客を褒め殺しするというパターンが無駄無く有効に機能するのは、宝石店などのお客に何か品物を買ってほしい場合である。

これで、その場その場に適した会話パターンがあることがおわかり頂けたと思う。上記のように一歩間違えて他のパターンを使ってしまったり、発言するセリフの順番を間違えると目的をうまく果たせなくなるので、その場に適した言語表現やパターンを身につけるという事は社会で生きていく上でも大変重要なことなのである。

このように「社会に機能している」という言語の側面に焦点を当てた選択体系機能言語学だからこそ、英語教育にも(英語に限らずどの言語教育においても)大変役立つわけである。そして、大事なことは、場面に密着した言語表現パターンの機能の仕方は言語や文化ごとに違うということまで、この言語学で指摘されていることである。我々は日本人だから、上述のレストランのような会話パターンは人から厳密にわざわざ教わらなくても、いつの間にか身につけてしまっているが、それが外国語の場合となると、たとえどんなに文法的な知識を有していても、その外国語特有の会話パターンがわからなければ、どういう発話をして、どのように振る舞ったらいいのかわからず、途方に暮れてしまう。つまり、

前述のレストランの会話例をそのまま英語に直訳して、料理を運んでくれたウェイトレスに "I'm sorry." と言ってしまったら、ウェイトレスの側は何故お客に突然謝られなければならないのか混乱してしまい、完全におかしな会話になってしまう。日本語特有の会話パターンをそのまま使っても通用しないのである。だからこそ、英語の場合だったら、英語における様々な場面の、ある程度パターン化した英語特有の会話表現を教えることが大変重要であり、そのような会話パターンを教えれば、とても実用的な役立つ英語を生徒達に教えることにつながるのである。例えば、レストランにふさわしい会話表現、ショッピングにふさわしい会話表現、何かを議論・討論する際の会話表現等のような、目的を効果的に達成できる為の、目的に応じた英会話パターンを教え込めば良いのである。

このような選択体系機能言語学を基にした英語教育を、英語ライティングに生かせない訳がない。英会話にも場面に応じた会話パターンが存在するように、英語の書き言葉にも、当然、何かを書く目的に応じたふさわしい英語の書き方パターンとルールが存在する。その目的別の「ふさわしい書き方」を教えれば良いのである。

### 3.2. パターンとルールを基調にした教え方

このセクションでは、2.1.で取り上げた問題を解消する為に、佐々木 (2001)<sup>5</sup> で指摘された英作文教授法を基に、パターンとルールを基調にした英語ライティング指導法を導入していく。佐々木 (2001) が提案する英作文教授法こそが、正に 3.1.で紹介した選択体系機能言語学を英語ライティング指導という分野にまで取り入れた最も効果的な指導法と考えられるからである。

佐々木 (2001) の講義で成された提案を私の言葉でまとめてみると、以下のようになる：「英会話、つまり、話し言葉レベルで、目的・用途に応じた会話パターンがあるように、書き言葉レベルにおいても、何を誰にどのような用途で書くかという目的に応じた英語特有の書き方のパターンがある。そして、1つ1つのパターンごとに1つ1つの書き方ルールがある。故に、そのような英語における前提やルールを学習者に教え込む際に、例えば、手紙なら手紙というパターンの中に潜んでいる手紙ルールを

教えたいのなら、まず先に、「英語話者が書いた英語の手紙」というお手本を学習者に見せてしまうことが大切なのである。そして、勿論、手紙に限らず、他の様々なパターンの英語の文章を沢山読ませながら、それぞれのパターンごとに存在するそれぞれのルールを教えて、最後はパターンごとの反復練習をさせる」。この新しい提案をもっと具体的に説明しつつ、私の考えも織り交ぜながら、より良い指導法を以下に展開していく。

第一段階として、英語の書式・パターンには、履歴書、手紙、ナラティブ (事実に基づく物語)、自己紹介文、論文など様々なものがあることを生徒に紹介する。そして、それら様々なパターンが実際に英語で書かれているサンプルを生徒達に見せて、読ませることをスタート地点に掲げる事が重要なのであって、決して、日本語の書式のサンプルを与えて英訳させてしまっただけではいけないのである。前述のとおり、日本語のルールに則った日本語サンプルを英訳させても何の意味もないからである。但し、日本語の手紙の書き方ルールと、英語の手紙の書き方ルールの違いを日英で比較しながら教えたいというのであれば、日本において典型的な手紙例と、英語の典型的手紙例を同時に見せながら教えるのはとても効果的であると私は考える。

第二段階で、英語のパターンごとの書き方ルールを教えるわけであるが、この際に、佐々木 (2001) では、前段落で述べたような、日本語のサンプルと英語のサンプルを同時に見せて比較しながら教えよ、つまり、日本語のサンプルも同時に使いなさい、という点には触れていないので、私はその点を新しく追加したいと考える。2つの言語のサンプルを比較しながらどのように具体的に教えるかを説明する為に、ここでは、日英の「フォーマルな手紙文 (紹介・推薦の手紙)」というパターンを取り上げることにする。

日本語の手紙文は、以下の例のように、①前文、②主文、③末文、④後付け、⑤追手書き、という独特のルールに従って書かれる：

#### (4)日本語の推薦手紙文<sup>6</sup>

##### ① 拝啓

残暑の厳しい毎日ですが、神田様にはますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

- ② ぶしつけで恐縮ですが、この手紙を持参してお伺い致します私の親友、梶原公一君に時間を割いて頂きたいと存じます。梶原君は株式会社境田建設の社員ですが、貴兄に是非ご面識を得たいと申しますので、伺わせました。東新宿再開発に関する業務提携のお話があるそうです。

本来ならば私も同行のうえご紹介すべきですが、なにぶん、決算期で繁忙を極めておりますため、本状にて失礼させていただきます。

では呉々も梶原君のこと、宜しく願い申し上げます。

- ③ 時節柄、お身体をご自愛下さいませ。

敬具

- ④ 八月十日

吉田一夫

神田光太郎様

- ⑤ 追伸 目を改め、私もお挨拶に出向きたいと存じます。

(4)のように、日本の手紙では、必ず最初に、頭語・時候の挨拶・相手の安否を気遣う文という3つから成る①の前文が来て、その後にはやっとな②の主文、つまり、一番伝えたい用件が来る。それから、もう一度③のところで、最後に相手を気遣う文章を書いて締めくくり、④に日付と自分の名前と相手の名前を、あくまでも相手の名前を上になるように書き、⑤は、主文で書き忘れてしまったことがある場合に後から付け足すものである、主文に全ての用件を書いた場合は必要ないというオプションである。つまり、用件を伝えることも大事であるが、それよりもっと大切なのは、用件を最初と最後の気遣いの文章によってサンドウィッチして包むという書き方・ルールである。日本語の手紙では、用件と同時に、相手を敬い気遣う気持ちを伝えることが大事であるが故に、このような形式で書かねばならぬというルールが存在する。

これに対して、英語で書かれた推薦手紙文の典型例は以下の(5)に示すとおりである：

(5) 英語の推薦手紙文<sup>7</sup>

- ① Star Enterprises  
(PTE)Ltd.

340. Paya Lebar Road  
A-Z Building #04-07 / 08  
Singapore 1530

- ② December 29. 19-

- ③ Ms. Anne Radice  
Personnel Manager  
NMWA Group  
32. Rue Bonaparte  
Paris. France

- ④ Dear Ms. Radice:

- ⑤ This letter is to introduce Mr. Ferdinand Tan. Mr. Tan has worked for my company, Star Enterprises, for fifteen years. He is a very good translator. He speaks several dialects of Chinese, Malay, and Hindi. He is, of course, fluent in English and French

Mr. Tan and his family are moving to Paris this month. I have given him your name as a person to contact regarding translation work in the Paris area. I would appreciate any suggestions you have for him.

- ⑥ Sincerely yours.

- ⑦ Chek Hu  
Vice President

(4)と(5)を比較してみると実に面白い。英語の場合、最初の①に来るのは、なんと自分の住所である。この例の差出人の場合はStar Enterprisesという自分の会社からこの手紙を出している為、会社名と会社の住所を①に書いているが、自分の家から出す場合は、差出人本人の名前と自宅の住所を①の欄に書くのが普通である。相手を尊敬し自分を謙遜するという日本の手紙では、このように自分の名前や住所を手紙の一番最初に書くとは到底信じられないことである。そして、次に、②で日付を書き、③で相手の名前・住所を書く(②と③はどちらが先に来てても良い)。それから④のように、必ず、Dear 誰々と

いう形で相手の名前を書き、⑤でやっとう件を述べ、用件の直後は⑥のきまり文句で締めくくり、最後に⑦のように差出人本人の名前を書くという①から⑦までの書き方ルールに従って書かれる。仮に、拝啓と敬具が、Dear～と Sincerely yours に相当するとは言え、日本の手紙のような、相手を気遣う為の前文（特に時候の挨拶と相手の安否を気遣う文章）と末文は見当たらない。英語の手紙にはそれらが無いからといって、決して、英語話者には季節感や相手を気遣う気持ちが無いということにつながるのではない。ただ、英語の手紙では、用件をいち早く正確に相手に伝えたいという機能を重視した合理的な書き方を前面に打ち出そうとした結果、(5)のような形式・書き方ルールが確立されてきたわけである。

以上のように、手紙というパターン1つをとってみても、書き方ルールの大きな違い（日本の「気遣い重視手紙文ルール」と英語の「機能重視手紙文ルール」）が存在するのであるから、この違いをしっかりと生徒達に教え込むことが大事である。

次に第三の指導段階として、実際に生徒達に英語の手紙文を書かせるという反復練習を行うことになるが、これは、佐々木 (2001) でも指摘されているように、いきなり自分のオリジナルの英語手紙文を書けといっても、やはり生徒達は困惑するであろうということで、その前に、「僕にも私にも英語のルールに則った英語手紙文が書けたぞ」という満足感・自信を与えることが大変重要なのである。どのようにして、自分にも出来るのだという自信を与えるかという点、例えば、(5)のサンプルを生徒に配ったのなら、(5)の①を自分（生徒自身）の名前に直してしまい、②はその日の授業の日付を書き、③は自分の友達の名前に書き直し、④も自分の友達の名前に書き直し、⑤と⑥はそのままにして、⑦も自分の名前に書き直ししてしまうという簡単な作業をさせ、それが出来た生徒を褒めるということである。あまり意味のなさそうな、ごく単純なタスクに思われるかもしれないが、初めて英語の手紙を書こうとしている生徒達にとっては、まるで、(5)の手紙を自分一人で書いてしまったかのような嬉しさを感じ、先生からも褒められて、満足感を味わうはずである。このやり方から始めて、徐々にルールを覚えさせ、反復練習をさせれば、いつの間にか、いちいち英語の手紙のサンプルを見なくても英語の手紙が書ける

ようになるというわけである。

最終段階としては、手紙以外の他の色々なパターン（自己紹介文、ナラティブ、履歴書、小論文）も、先述の第二段階・第三段階のように教え込めば良い。生徒達が色々なパターンにおいて、徐々にオリジナルな英作文を書けるようになってくれば、それに伴い、英文法や英語表現の間違いも必ず増えてくるはずであるが、そこで、細かい英語表現の間違いを直す事にばかり専念しないで、英語のパターンとルールを教え込む段階では、あくまでも、1つの英語のパターンに存在する1つの英語書き方ルールをきちんと守って書かれているかどうかという方に重点を置いて採点・指導することが大切である。生徒がきちんと英語ルールに従った英作文を提出してきたら、多少英語表現の間違いが目立っても、しっかり褒める必要があると考えるのである。

以上が、選択体系機能言語学に基づいた、「パターン・ルールを基調にしたライティング指導法」である。しかし、最後に、オリジナルな英作文が書けるようになればなるほど、英語表現の間違いも増えてくるという状況を指摘した。ルールに沿って書けるようになったことを褒めるのも大切であるが、英語表現の間違いをいつまでもそのまま放置しておくわけにもいかない。ということで、そのような間違った英語表現を正す為にも、2.2.でも取り上げた問題点「いかにして、正しい英語表現をわかりやすく効率的に体系的に教えるか」を解決する指導法を次章で提案する。

#### 4. 英語特有の「認知ルール」の教授

前章で述べたように、英語の様々な書き言葉パターンのルールを身につけないことには、いくら正しい英語表現を使っているとしても、英作文を読んでも相手の英語話者にとっては理解度の低いものにしかなり得ない。故に、初期段階として、英語特有の書き方ルールを教え込むことの必要性を3章で論じてきた。そして、次に生じてくる問題が、今度は、いかに英語のルールに則った英作文を書いても、英文法や表現が間違っているのはやはり相手に対して意味の通じにくい英作文になってしまうので、いかにして効率的に体系的に正しい英語表現を教えることが出来るかということである。この問題まで解

決しないことには、英語ライティング指導法の仕上げが出来たとは言えないのである。つまり2章の2.2でも指摘された正しい英語表現（特に、英語の冠詞の正しい使い分けや動詞の時制・アスペクトの使い分け）をいかに教えていくかという第二の問題点を克服する為に、4章では、英語話者特有の「物の認知の仕方」を最初に教え込んでしまうことにより、それが反映されている日英の言語表現・文法の違いを体系的に教えることが出来るという重要性を主張する。そのもともとの認知の仕方の重要な違いを説明するには、認知言語学という分野の協力が必要なので、4.1.でそれを紹介することにする。

#### 4.1 認知言語学について

2章で焦点を当てたような、英語の複雑な冠詞の使い分けや、動詞の時制・アスペクトの選び方をわかりやすく生徒に教えるには、英語には英語話者特有の物の認知の仕方があるからこそ、それが、英語独特の冠詞の使い方や動詞の使い方に表れているのだという事を教える必然性が生じる。そこで、物の認知・認識の仕方と言語の関わりについてを追究する分野である認知言語学を記述しておくことが必要になる。

認知言語学とは、我々人間が言葉・言語を通してどのように色々な物を認知しているのか、また、我々が普段何気なく使っている言葉に人間の物の認知の仕方がいかに反映されているのかを追究していく分野である。しかし、実際に、人間がどのように自分の周りにあるものを認知して、自分が認知したものを言葉にして表現するのかというプロセスは、人間の脳を割って見てわかるものでもなく、目に見えてわかるものでもない。そこで、沢山の言語、つまり、語彙レベルからセンテンスそして文法レベルまで、沢山の言語表現を観察してみることに、きっと、人間はこうやって認知しているからこそ、こういう単語が生まれたのだらうとか、この文法には人間のこういう認知の仕方が反映されているのではないだろうかというように、推測・仮説をたてていくのが、認知言語学なのである。

では、人間の物の認知の仕方がいかに言語表現に反映されているかという事を以下の具体例(6)と(7)を使って詳しく説明する。(6)と(7)では、主人公 "I" が見ている光景（男の人が通りを渡っている光景）

は全く同じものであるが、違う英語表現で表されている：

(6) I saw him cross the street.

(7) He was seen to cross the street.

この違いを説明するには、まず、人間には物を認知して把握しようとする時に、何かある部分に焦点を当てて目立たせる部分と、後ろに押しやって背景化する部分という2つに分けて見ようとする傾向があると、認知言語学で仮定されている事から入っていかなければならない。この人間の認知傾向を使って説明すると、(6)では、"him"という男の人が通りを渡っているところを見ている動作主の "I"、つまり、男の人を見ている "I" という人物に焦点が当てられていて、"him cross the street"の部分背景化されて認知されているからこそ、(6)のように "I" が主語となって目立つような語順・文法の文章となって表れていると推測することが出来る。これに対して(7)では、(6)で背景化されていた "him cross the street" 中の "him" という男の人の方に今度は焦点が当てられて、その男の人以外の事物が背景化されて認知されているというプロセスを反映すべく、(7)のように "He" が主語となった語順・文法で状況が表現されていると仮定することが出来る。このように、同じ状況でも、それを見て把握する時の焦点の当て方が変われば、2つの例文のように表現の仕方も変わってくるということで、物の認知・把握の仕方の違いが文法の違いに表れると仮定することの意義がおわかり頂けたと思う。

これらのことを、2.2.で取り上げた、英語の冠詞や動詞の時制・アスペクトの複雑な使い分けとつなげる事は大変重要である。上記の(6)と(7)の英語表現に物の認知の仕方が反映されていたのと同様、英語の冠詞の使い分けや動詞の時制・アスペクトの使い分けという2つの文法事項にも、英語話者の冠詞や名詞や動詞に対する認知の仕方が反映されていると仮定すべきなのである。つまり、今までこの2つの文法事項が大変苦手とされてきたのは、英語には英語独特の文法事項の認知の仕方があるにも関わらず、それを学ばずに、日本語話者の名詞・動詞に対する見方・認知の仕方をそのまま英語にもあてはめてしまってきたからである。だから、日本



人は 2.2 で見た(2)(3)のような間違いを起しやすいためである。つまり、日本語の把握・認知の仕方そのまま英語にあてはめて直訳してしまった非文法的な英語表現を日本人はよく書いてしまうのである。

次のセクション 4.2. では、ここで紹介した認知言語学を基に、英語話者は英語の名詞や動詞（時制・アスペクト）をいかに認知しているかをつきとめ、それから 4.3. で、どのように生徒達に英語の冠詞や動詞の時制・アスペクトの使い分けを体系的に教えればよいのかを提案する。

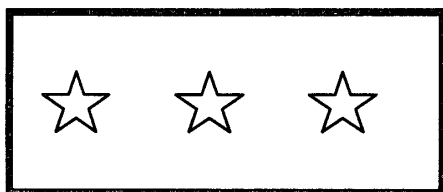
## 4.2. 英語の名詞・動詞の認知の仕方

ここでは、最初に、英語話者の名詞や動詞に対する認知の仕方を明らかにする為に、日本語話者の日本語の名詞・動詞の認知の仕方と比較しながら説明する（4.2.1. で英語の名詞の認知の仕方を明示し、4.2.2. で英語の動詞の認知の仕方をつきとめる）。

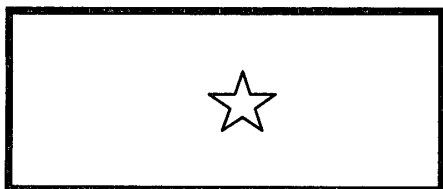
### 4.2.1. 英語の名詞の認知の仕方

まずは、英語の冠詞の使い分けというのは、その冠詞の直後に来る名詞をいかに認知しているかによって成されるものなので、それを理解する為に、日本語の名詞に対する認知の仕方と英語のそれを比較検討する。次の例から日英の名詞の認知の仕方が違うことが仮定出来る：

(8) a.



b.



(9) a. 鳥が水に浮かんでいる。

b. A bird is floating on water.

もし、(8)のような a, b 2つの絵を英語話者に見せて英語で表現するように頼めば、(8a)に対しては "a

star"、(8b)には"three stars"と答えるはずであり、無冠詞のまま "star" と答える英語話者は絶対いない。日本語でもそのように（1つの星、3つの星と）言えないこともないし、2つの絵の区別くらいつくが、日本語であれば、両方の絵に対して「星」や「星がある」と表現できる。つまり、"a star"や"three stars"のような表現と全く違って、数量にこだわらない言い方が出来る。特に、(8a)の絵を見せながら、「この絵を日本語と英語で表現して下さい」と日本語話者に尋ねれば、まず「星、star」と答える人が大多数で、「1つの星、a star」と答える人はほとんどいないと思われる。このことから、日本語話者は数を数えられないというわけではないが、日本語話者よりも英語話者の方が名詞に相当する物を認識する時に、数量にこだわって物を見て認知していることが大いに推測される。

(9)は、同じ状況を日本語と英語で表現したものであるが、(9a)では日本語で鳥も水も同じように表せるのに対して、(9b)では"bird"の方には冠詞の"a"をつけ、"water"の方は何も冠詞をつけないという大きな違いを持って2つの名詞が表されている。この場合も、日本語では鳥と水の性質の違いが認識できないというわけではないが、英語話者の方がより鳥や水の性質にこだわって、それらが境界を持っているかないか、そして、数えられるか数えられないかが明確に"a bird"と"water"で表現されているのである。

認知言語学者の研究 Langacker(1987) や Talmy(1988) では、これらの性質の違いを "boundedness: bounded vs. unbounded" という用語で説明している。つまり、英語話者が物を認知する際には、その対象物が bounded（はっきり境界を持っているか）であるか unbounded（水やオイルのように境界を持っていないか）の性質であるかという二項対立で分けて見ていて、数量にもこだわる為、bound な性質であれば count noun（数えられる名詞）として表現するので "a"や"the" がついたり、複数形の"s"が語尾についたりするが、unbound な性質であれば mass noun（モヤモヤとしたはっきりしない物として数えられない名詞）として表現するので、数えられない証拠として冠詞の"a"や"the"もつかないし、複数の"s"もつかない。何回も念を押すようだが、日本語にはこのような表現形式がないからとい

って、対象物を数えたり性質を見極めることが出来ないというわけでは決してない。ただその対象物を認知して言語化する時に、対象物の数量や性質に英語ほどはこだわらないというだけである。

以上からして、英語話者が対象物となる名詞を認知する時には、境界で区切ることが可能な数えられる個別の塊：「unit なもの」か、境界で区切ることが出来ず数えられないモヤモヤしたはつきりしないもの：「mass なもの」という二項対立で見ることが推測される。日本語でも確かに普通名詞・抽象名詞の区別はしているが、やはり、全ての名詞をこのようなはつきりとした unit vs. mass という二項対立の概念を用いて分類して認識するという英語の独特の認知とは全く違うのである<sup>8</sup>。

#### 4.2.2. 英語の時制・アスペクトの認知の仕方

英語では動詞を使う時に、その動詞の動作がいつ行われているのかという時制にこだわり、それと同時に、その動作が完結しているのか完結していないのかというアスペクト(相)も必ず考慮する。何故そのような時制とアスペクトにこだわりを見せるのかを説明する為に、もう一度、2章で取り上げた日本人の間違えやすい英語表現をここに示しておく：

- (10) a. \*I'm very busy because I am belonging to a club. (→belong to)  
 b. \*She is resembling her mother. (→resembles)
- (11) a. \*I got hungry. (→am)  
 b. \*She said she has a headache. (→had)

2章でも既に説明したように、(10)は英語のアスペクトの間違いであり、(11)は時制の間違いである。

最初に英語はどのようなアスペクトの認識の仕方をしていると仮定されているかを見ていく。先程も出て来た認知言語学の研究 Langacker(1987)と Talmy(1988)においては、全ての英語動詞が、英語の代表的アスペクトである perfective (完了相)か imperfective (非完了相)のどちらかに大まかに分類されるのには、4.2.で観察してきた名詞の場合と同様の二項対立概念を使った認知が関わっていると

提案されている。ここで、完了相の動詞というのは、jump, kick などのように動作が完了・完結してしまう動詞を指し、非完了相の動詞は、resemble, know などのように動作が完了しない終わらないタイプの動詞を言う。

つまり、Langacker と Talmy が主張しているのは、前セクションで見た名詞を分類・認知する為の概念であった "boundedness: bounded vs. unbounded" が、これら英語動詞のアスペクト (完了相か非完了相か) の区別にもあてはまるということである。具体的に述べると、何らかの変化を伴うという意味内容を動詞が示す為に、時間・空間的に境界で区切ることが可能な bounded な動詞が完了相に分類され、一方、静的な状態の持続という意味内容を動詞が示す為に時間・空間的に unbounded で境界で区切ることが不可能な動詞が非完了相に分類されると仮定している。故に前段落で述べたように、完了相に分類される動詞というのは、'jump, kick, learn, arrive' のようなはつきりした動作の動詞になり、非完了相に分類される動詞は、'resemble, have, belong, know, like' などのようにどこからどこまでが動作のまとまりなのか境目がわからないようなモヤモヤした動詞になるのである。このように、動詞のアスペクトに関しても、名詞の場合のような二項対立(unit vs. mass)の認識様式 (はつきりした個別の物か、モヤモヤしてはつきりしていない物かという見方) が使われていることがわかる。

これに対して、日本語では、'jump, kick, learn, arrive' vs. 'resemble, have, belong, know, like' のような「完了相 対 非完了相」という二項対立の概念を使って、日本語動詞を分類して認識しているであろうか？ 勿論、答えは No である。これらの例の合計9つの動詞全てまとめて、同じような動詞であると見なしていると考えられる。英語の resemble, belong に相当する日本語の「似る」「属する」という動詞も、日本語の認識からすると、jump, kick と同様に、動作が完了してしまっているという完了相であり、「～ている」を付けて初めて非完了相の「似ている」「属している」になれて、動作が完了していない続けている感じを表せるのである。

要するに、「ている」を動詞にくっつけさえすれば、非完了相(継続中で終わっていない状態の動詞)になれるという日本語のルールを英語にも適用し

てしまった結果、(10)のような間違いが起きるのである。原形の *resemble*, *belong* も日本語と同様もともと完了相の動詞だと勝手に思い込み、「ている」に相当する 'ing' を付けて、「似ている」=*resembling* だとしてしまうのであろう（厳密に言えば、ている = *ing* と見なすことも間違っている）。だが、*resemble* も *belong* ももともと英語では非完了相と認識されている為、わざわざ非完了相にする為の -*ing* 形にする必要はないのである。

次に英語の時制の認知の仕方に移る。英語話者が発話する時は、必ず発話している現時点を基準にして、その現時点から、発話している内容が過去のことなのか未来のことなのかを表現する。故に例(12)のように、現在の内容は現在形で表されなければならないが、過去の発言は必ず過去形で表現される必要がある：

- (12) a. I am hungry.  
b. She said she had a headache.

(12a)では「お腹がすいている」という現在の状態を表すのだから、"I am hungry"のように現在形でしか言えず、(12b)では彼女が「頭が痛い」という状態にあったのは、(12b)の発話時点からすれば過去のことになるので、いくら、彼女が頭が痛かった時点では"I have a headache."と言ったとしても、それから時間が経ってしまった(12b)の発話時点では「痛かった」という過去の出来事になるので過去形で表現せざるを得ない。このように、常に今、発話している現時点が基準となって、厳密に時制が決められるという認知様式を持っているのが英語である。

ところが、日本語話者がこれら2つの文章を(11)のように間違えた英語で表現してしまうのは、日本語話者は上述のような厳密な時制の認識の仕方ではなく別のやり方で時制を捉えているからだとしか言いようがない。日本語で、現在のことなのに(12a)の状態を「お腹がすいた」と言えたり、(12b)を「彼女は頭が痛いと言った」のように「痛い」と「言った」の時制を一致させなくても何の支障もきたさないのは、尾上(1995)でも指摘されているように、英語の時制認識とは違って、日本語の時制の認識点(基準となる視点)が自由に動けるからである。発話しているその時点が認識点となっている英語

とは違って、日本語の時制の認識点は、自由に過去や未来に動けるので、例えば、『彼女は「頭が痛い」と言った』という発話をした場合、認識点が「頭が痛い」という過去に戻ってしまっている為、わざわざ過去形で表す必要がなくなるのである。つまり、頭痛がした時点という過去にすっかりタイムトリップしてしまっていて、過去の世界に入り込んでしまっている為、その世界をわざわざ更に過去形で表現する必要はないのである。そして、「お腹がすいた」に関しては、認識点が自由に動けるという認知の仕方に加え、日本語の「～た」形や「～した」形の特殊な機能が関係してくる。「～た」形や「～した」形は、実は過去だけを表す時制の表現として限定されるのではなく、「あっ、ここにあったあった！」等のような今起こっていることの表現や「私もそう思った」などのように現在のずっと進行している状況すら「～た」形で表現出来るという事実からも、現在のことや現在進行形のことまで表現出来てしまうという、1つの「～た」形という形態で様々な時制とアスペクト両方にまたがってカバーしていることがわかる。このことから、日本語においては、英語のような厳密な時制の認識や、完了相か非完了相なのかというアスペクトの厳密な区別はあまり成されていずに、時制やアスペクトがごっちゃになったままで動詞を認識し使っていることがわかる（それは、認識点が自由に動けるからこそ、厳密な時制表現をしなくていい為である）。この日本語独特の曖昧な時制やアスペクトの認識から、「お腹がすいた」という、英語から見れば不思議な表現が生まれてくるのである。

こうして、日本語には、英語のような厳密な二項対立概念のアスペクト認識や、厳密な時制認識が無い為、英語の認知ルールを知らない日本語話者は、(10)(11)のような間違いをするのである。次の 4.3. では、4.2.1 と 4.2.2. で明らかにしてきた、英語の名詞と動詞(時制・アスペクト)の認知を基に、包括的、且つ、体系的にどのような文法指導を生徒にすればよいかをまとめる。

### 4.3. 新しい文法指導法

以上で、日本語話者が、英語の冠詞・時制・アスペクトでつまずきやすいのは、名詞や動詞の認知の仕方が日本語と英語では全く違う為、特に、名詞や

動詞を「unit vs. mass」という英語独特の二項対立で認知しているという概念を日本語話者は持っていないからであることがわかった。故に、よりスムーズに包括的に冠詞の使い分けや動詞の時制・アスペクトの使い分けを教えるには、我々日本語話者には

全くない感覚である unit/mass に代表される二項対立を使って、名詞・動詞をまとめて教え込めれば良いのである。それには、井出(1994)の研究に加筆した以下の図を使うのが有効であると考えられる。

### (13) unit/mass の概念カテゴリー

#### UNIT

輪郭がガッチリしたもの

数えられる

確実に完結している

客観的なものとして把握

事象をクールに捉える

名詞：COUNTABLE（可算名詞）

- ・ Could you peel an apple?
- ・ I bought ten cakes for today's party.

動詞：PERFECTIVE（完了相）

- ・ I kicked the ball.

動詞：SIMPLE ASPECT（単純な現在・過去形）

- ・ The boy fell.
- ・ I get up at seven every morning.

#### MASS

輪郭がボンヤリしたもの

数えられない

不確定、進行中

一時的な不安定なものとして把握

事象に対する共感・感情移入あり

UNCOUNTABLE（不可算名詞）

- ・ I don't like apple in salad.
- ・ My mom is baking cake for the party.

IMPERFECTIVE（非完了相）

- ・ She resembles her mother.

PROGRESSIVE（進行相）

- ・ The boy is falling.
- ・ But this week I am getting up at six.

上の表の中で、名詞では、りんごもケーキもそれぞれの状況・見方・認知の仕方によって可算名詞になったり不可算名詞になったりする。通常は1個2個と数えられても、サラダの中にもりんごをペースト状にしたものが入っていてとても境界で区切るのが不可能な場合はmassとして認知されるのだから、不可算名詞として"I don't like apple in salad."という表現になる。とにかく、見たものを性質・数量の観点から認識して必ず、unit か mass に振り分けるのである。同様に、表の中の「PERFECTIVE（完了相）対 IMPERFECTIVE（非完了相）」からわかるとおり、名詞だけでなく動詞も、動作がはっきり完了・完結したものとして認識される kick のような unit な動詞か、逆に動作の始まりと終わりがわからず完了していないはっきりしない状態動詞として見なされる resemble のような mass な動詞か、というように、動詞も unit/mass の二項対立で認知・分類している。また、「SIMPLE ASPECT（単純な現在・過去形）」対「PROGRESSIVE（進行相）」の欄でわかるように、fall や get up のような同じ1つの動詞でも、状況によって unit として把握されたり、mass として認知

されたりする。"The boy fell."のように1回で動作が完結するものや、"I get up at seven every morning."のように1回の習慣が毎日反復されるという状況は、はっきりとしたまとまりのある unit としてみなされるのに対し、"The boy is falling."のように継続中のものや、"But this week I am getting up at six."のように、今週は多分6時に起きるつもりですという曖昧な近未来の予定は、ぼんやりとした mass として認識される。

(13)の表を生徒達に見せて、英語の名詞も動詞のアスペクトもまとめて体系的に教えれば、いちいち従来のように、可算名詞に分類されるものと不可算名詞に分類されるものを丸暗記させる必要もなくなり、又、何故、進行形で現在進行中の動作のみならず、不確かな予定まで表せるのかも、この図を見れば一目瞭然である。この表には動詞の時制まで組み込むことは出来なかったが、動詞の時制については、先程の4.2.2.で説明したように、日本語と英語では時制の認識点が違う（英語は常に発話時点が認識点だが、日本語の場合は自由に認識点が動ける）ということをお伝えしたい。

## 5. Rule-based の英語ライティング指導法

この章では、3章4章で提案した2つの英語ライティング指導法（題材選びレベルと文法レベルの指導法）を整理し、新しい英語ライティング指導法をまとめる。

最初は、3章で述べたように英語の細かい文法や表現の間違ひにはこだわらずに、ひたすら、英語書き言葉の様々なパターン（手紙文・ナラティブ・論文・自己紹介文など）と、それぞれのパターンにある書き方ルールを教え込むことが重要である。その為、英語の様々なパターンのサンプルを見せて、生徒に読ませて、どのパターンにどのような書き方ルールがあるのか、しっかり覚えさせる必要がある。日本語の書式・形式・書き方ルールとはこんなにも英語の場合は違うという、日英の違いをしっかりと明示しながら、英語の書き方ルールを教えることも大切であるが、決して、日本語のサンプル（日本語の手紙文など）をそのまま和文英訳させてはいけないことに注意すべきである。

次に、英語のサンプルの一部を、つまり、英語の手紙文のサンプルだったら、差出人の名前を生徒自身の名前に直させたりして、少しずつ英語サンプルに手を加えさせていくことから、生徒に自信や満足感をつけさせて、英語の手紙文になじませることが大事である。非常に単純な作業だが、差出人の部分を生徒自身の名前に書き換え、宛名の部分を生徒の友達の名前に書き換えただけでも、よくできましたと褒めてあげることも必要になる。そのようにして少しずつ生徒に英語の手紙文が私にも書けるようになったという自信をつけさせるべきなのである。その後は徐々に、生徒各自によるオリジナルの英語の手紙文を沢山書かせるのである。そうすれば、いつの間にか英語の手紙文書き方ルールをすっかり身につけてしまっているはずである。最後の段階としては、手紙文という1つのパターンだけでなく、他のパターンも同様の手段で反復練習させていけば、色々なパターンのルールを覚え、英語の書式に則った英作文が書けるようになるのである。この段階では、多少英語表現に間違いがあっても、パターンとルールを覚えさせることが目的なので、文法的な間違いにはこだわる必要はない。

しかし、いつまでも間違った英語表現をそのまま

放置しておくわけにはいかないで、生徒達がパターンとルールを身につけてしまい、オリジナルな手紙文などが英語の書き方ルールに則って書けるようになってきたら、その後に細かい文法指導も導入していくべきである。その際に、生徒がよく間違えやすい英語表現の典型例は、例文(1)~(3)に挙げたような、冠詞の使い分けや動詞の時制・アスペクトの使い分けになるであろうことは予測がつくので、これらのものをまとめて、英語の名詞・動詞の認知ルールとも言える表(13)を見せながら、英語特有のunit/massの二項対立概念を使って、英語の名詞の認識の仕方や、動詞のアスペクトの認識の仕方を最初に教えてしまえばいいのである。そして、日本語とは違って、英語の名詞も動詞（特にアスペクト）もいつも数量や性質にこだわって認知している、そのような認知形態を持ったものが英語なのであるということも教えておけばよい。その後に、冠詞の使い分けであれば、'a, an'が非特定の概念を表し、'the'が特定の概念を表すものであって、unitで数えられる名詞と認知されたものには必ず、aかtheをつけるか、複数形にするかどうかで数量をはっきり冠詞と共に明示する必要が英語にはあるということを教授するのである。最後に英語動詞の時制については、英語と日本語の時制では、時制の認識点が違って、英語は常に発話している現時点が基準となって時制表現を決めているのに対し、日本語は認識点が自由に過去にも未来にも動ける為、英語のように厳しい時制表現にこだわらず、現在のことを過去形で言えたり、過去のことを現在形で言えたりしてしまうので、その日本語の感覚をそのまま英語の動詞の時制にあてはめてしまわないように注意しておくべきである。また、最後に、もし、生徒が"I got hungry."などという間違った英語を書いても、「あなたは、日本語の「お腹がすいた」をそのまま忠実に英語に直した文を書いたということだから、あなたの日本人らしさがこのような日本語らしい英語に表れたのですよ。あなたは本当に日本人らしい日本人ですね」と褒めてから訂正するのも悪くないと考える。

以上のように、英語の書式指導レベルについても、文法表現指導レベルにしても、生徒達に英語独特のルールがあるのだということを最初に教え込むことが何よりも重要なのである。英語の書式レベルで

は、英語の手紙文には英語手紙文書き方ルールがあり、英語の論文には英語論文書き方ルールがあるという、書き方ルールを教え込み、文法表現レベルでは英語には英語話者独特の名詞や動詞（時制・アスペクト）の認知ルールがある事を教えておくことが大切である。このような「英語のルール」を教えるという指導法を導入すれば、教師の側も、添削に時間のかかる恐怖の和文英訳から逃れることが出来て、ルールを最初にたたき込ませるという楽な教え方が出来、生徒の側も、単なる和文英訳をさせられた時よりも、実用的な英作文と、ルールがわかっている為に応用の効く英作文を身につけることが出来るのである。何を教えるにも、最初に英語のルールを叩き込むという、rule-based なライティング指導法が教師にとっても生徒にとっても効果的なのである。

## 6. Conclusion

本稿では、教師の側にとっても生徒の側にとっても苦手とされている英語ライティングという授業で、どのような指導をすれば、双方にとって楽しく、又、実用的な英作文を教え教わることが出来るかということ、従来の英語ライティング指導法の問題点を挙げることを発端として、追究してきた。従来の指導法の1つ目の問題は、日本語の書式やルールに従って書かれた日本語サンプル（日本語独特の手紙など）を英訳させていたことにより、言語は英語だが書き方ルールは日本語のままという奇妙で非実用的な英作文しか出来なかったことであり、2つ目の問題点は、細かい英語表現の間違いをただ1つ1つ赤ボールペンで訂正するだけという消極的なその場凌ぎの英文法指導しかしていなかった為、生徒達はなかなか、正確な英語表現（特に冠詞の使い分けや動詞の時制・アスペクトの使い分け）を持続的に身につけることが出来ずにいたことである。

これら2つの問題を解消するために、選択体系機能言語学と認知言語学という2つの分野を基にした英語教育を参考にして、新しく「Rule-based の英語ライティング指導法」を提案した。英語には英語特有の手紙文や論文の書き方ルールがあるので、実際に英語で書かれた手紙文や論文のサンプルを見せながら、どのような書式・ルールに従って英語の手紙や論文を書けばいいのかを最初に教えることが重要で

あり、これによって、間違った題材選びと間違った和文英訳という第一の問題点は解決できる。書式ルールを教えた後には、細かい英語表現の間違いをいかに訂正するかという第二の問題点に移るが、これも1つ1つただ間違いを訂正するのではなく、英語には英語特有の名詞・冠詞や動詞（時制・アスペクト）の認識の仕方、つまり、英語独特の認知ルール：名詞も動詞も unit/mass の二項対立概念で認識している、があるということを最初に教えてしまえば、生徒が何度も同じ表現を間違い続けるということを防げるであろう。

以上の「書式ルール」と「認知ルール」という2つの rule-based な英語ライティング指導法を行ってルールさえ身につけさせれば、生徒の方も同じ間違いを何回も繰り返さずに済むので、採点する側の教師も従来より楽に指導することが出来るはずである。

東京工芸大学

## 参考文献

- 井出祥子 1994 「unit/mass の概念認識と文法範疇——英語の冠詞とテンス/アスペクトの語用論的解釈」  
日本英語学会 第12回大会 発表論文
- 尾上圭介 1995 「グラウンディング形式としてのシタ・シテイル」 第5回 CLC 言語集中講義の研究発表
- 佐々木真 2001 「英作文を考える：選択体系機能言語学」 横浜「言語と人間」研究会 第27回春期セミナーの講義
- 吉川千鶴子 1994 『日英比較 動詞の文法 発想の違いから見た日本語と英語の構造』 東京：くろしお出版
- Halliday, Michael.A.K. 1978 *Language as social semiotic*. London: Edward Arnold.
- Langacker, Ronald 1987 Nouns and verbs. *Language* 63: 53-94.
- Talmy, Leonard 1988 The relation of grammar and cognition. In: Brygida Rudzka-Ostyn (ed.) *Topics in cognitive linguistics*, 165-205. Amsterdam: John Benjamins.

- <sup>1</sup> 英語の文法的アスペクト（相）には、完了相 (perfect)(have+-en) と進行相 (progressive)(be+-ing) があり、アスペクトというのは、始動・継続・完了などの動作の過程を表すための文法範疇として用いられる用語である。発話時とは無関係であるということから、時制(tense)とは異なるものである。
- <sup>2</sup> これらの4つの例文は、Keene, Dennis and Tamotsu Matsunami 1969 Problems in English: An approach to the real life of the Language. Tokyo: Kenkyusha. の20～21ページの例文を引用したものである。
- <sup>3</sup> これら2つの例文は、吉川千鶴子 1994 『日英比較 動詞の文法 発想の違いから見た日本語と英語の構造』 東京：くろしお出版 の148, 170ページから引用したものである。
- <sup>4</sup> 選択体系機能言語学の日本語の文献では、佐々木真 1997「日本語の Clause の分析：分類基準と clause の関係に焦点をあてて」横浜「言語と人間」研究会（編）『ことばと人間』第1号：67-74.や、山口登 2000「選択体系機能理論の構図：コンテキスト、システム、テキスト」小泉保（編）『言語研究における機能主義：誌上討論会』東京：くろしお出版、等を参照されたい。
- <sup>5</sup> 佐々木(2001)の講義の要約を文字化したものは、2001年6月に横浜「言語と人間」研究会で編集・出版された「会報 No.33」の5ページを参照のこと。
- <sup>6</sup> この手紙文は、中川越 (1987) 「実用手紙文百科」東京：永岡書店 の137ページの例文を基に加筆・修正したものである。
- <sup>7</sup> この英語の手紙文は、Lougheed, Lin (1989) Preparation series for the TOEIC test: Introductory course. (2nd ed.) New York: Longman. の167ページからそのまま引用したものである。
- <sup>8</sup> 日本語の普通名詞 vs. 抽象名詞が、一見、英語の count noun vs. mass noun に相当するようにも思えるが、日本語の普通名詞の中には沢山の mass noun が含まれている為、やはり、英語の場合とは違う認識を日本語話者は名詞に対してしているとしか考えられないのである。